

## テサロニケ人への手紙第一1章3節 「信仰、愛、そして希望」

### 1A 信仰の働き

1B 行いとは別の救い

2B 生きた信仰

1C 神の恵みを知った実

2C アブラハムの信仰

3C 人を救う信仰

### 2A 愛の労苦

1B 労苦する愛

1C ラケルを愛したヤコブ

2C 非常に労苦した人々

2B 行いに現れる愛

1C イエスの命令

2C 「羊を飼いなさい」

3B 愛から離れた労苦

### 3A 希望の忍耐

1B 主の到来

2B 忍耐しながらの待望

1C 困難な時

2C 実が結ばれる時

3B 希望による救い

## 本文

テサロニケ人への第一の手紙、1章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、コロサイ書を終わりました。今日の午後、1章を一節ずつ見ていきます。10節しかない章ですが、内容は盛りだくさんです。今朝は3節に注目します。「**私たちの父である神の御前に、あなたがたの信仰から出た働きと、愛から生まれた労苦、私たちの主イエス・キリストに対する望みに支えられた忍耐を、絶えず思い起こしているからです。**」パウロは、テサロニケ人の人々のことをいつも覚えて祈っていました。そして、彼らのことを覚える時に、ここに書かれていることを絶えず思い起こしていたのです。信仰から出た働き、愛から生まれた労苦、主イエス・キリストに対する望みに支えられた忍耐です。信仰、愛、そして希望です。

私たちが交読文で、第一コリント13章を読みましたが、そこにも、結論が書かれていました。「**こ**ういうわけで、いつまでも残るのは信仰と希望と愛、これら三つです。(13節)」その他にも、いろい

ろなところで、愛、信仰、希望を三つ巴で語っています。例えば、コロサイ書にもあります。「コロ 1:4-5 キリスト・イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対してあなたがたが抱いている愛について聞いたからです。それらは、あなたがたのために天に蓄えられている望みに基づくもので、あなたがたはこの望みのことを、あなたがたに届いた福音の真理のことばによって聞きました。」他にも、いくつもあります。このように、キリスト者として、この三つが大きな特徴になっているということです。テサロニケの信者たちにこの三つがあり、パウロは思い出しては、神にいつも感謝していました。

## 1A 信仰の働き

パウロは、テサロニケ人について信仰だけでなく、「**信仰から出た働き**」を思い出していました。

## 1B 行いとは別の救い

私たちは、「信仰」は「働き」ではないと勘違いしてしまします。律法の行いによらないで、神の恵みによって、信仰によって救われるのではないか？と思うからです。

事実、救われるために必要なのは信仰だけであって、行いによってではありません。「エペ 2:8-9 この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。それはあなたがたから出たことではなく、神の賜物です。行いによるものではありません。だれも誇ることもないためです。」私たちがいかに、律法によって神に正しいと認められようとしても、自分たちはすでに罪の中で死んでいて、それは不可能です。金持ちの青年が、イエス様から悲しい顔つきで離れて行った時に、金持ちが神の国に入るのは、らくだが針の穴を通るよりも難しいと言われましたね。自分の義によっては、神の義に達することは決してできません。

しかし、キリストが私たちの罪のために供え物となってくださいました。ここに、福音、良い知らせがあります。神がキリストにあって行われたことに私たちが信頼して、この方を主として自分を任せる時、神が恵みによって罪を赦し、義と認めてくださいます。自分の行いとは全く別に、恵みによって、私たちが義とみなしてくださるのです。

## 2B 生きた信仰

### 1C 神の恵みを知った実

しかし、行いとは別の、神の救いを知った時に、その恵みを知った人は、行いの中に、その信仰の実が表れます。「コロ 1:6 この福音は、あなたがたが神の恵みを聞いて本当に理解したとき以来、世界中で起こっているように、あなたがたの間でも実を結び成長しています。」イエス様の恵みを知った人は、いたってもいられなくなり、悔い改め、良い行いをしようとします。

ザアカイのことを思い出してください。彼は取税人で、人々から、だましとっていました。しかし、

イエス様が、いちじく桑の木によじ登っていた彼を見て、「ルカ 19:5 ザアカイ、急いで降りて来なさい。わたしは今日、あなたの家に泊ることにしているから。」と言われました。そしてイエス様を自分の家にお迎えすると、彼は、「19:8 財産の半分を貧しい人たちに施します。だれかから脅し取った物があれば、四倍にして返します。」と言いました。そしてイエス様は、「19:9 今日、救いがこの家に来ました。」と言われました。なぜですか？悔い改めの実を見ることができたからです。彼がイエス様の恵みに触れて、この方を信じて、それで良い行いの実を結んでいるのです。

### 2C アブラハムの信仰

アブラハムの信仰を思い出してください。彼は、信仰の父であるとパウロは、語りました。「ロマ 4:2-3 もしアブラハムが行いによって義と認められたのであれば、彼は誇ることができます。しかし、神の御前ではそうではありません。聖書は何と言っていますか。「アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた」とあります。」しかし、ヤコブ書では、このようにあります。「2:21-23 私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇に献げたとき、行いによって義と認められたではありませんか。あなたが見ているとおり、信仰がその行いととも働き、信仰は行いによって完成されました。「アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた」という聖書のことばが実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。」

これはどういうことなのでしょう？アブラハムの全生涯を見ればよく分かります。彼は、まだ見ていない土地に、主に行きなさいと命じられてカナンの地に行きました。しかし、その信仰は未熟でした。飢饉があった時に、エジプトに下りました。なんと自分の妻、サラを自分の妹だと言って、エジプトのファラオが自分の女にしようしました。ところが、主はアブラハムではなく、ファラオの家に災いが来るようにされました。アブラハムは、自分の行いにかかわらず、神がただ良くしてくださるのを見ました。それで、彼の信仰が成長したのです。彼は、自分の行いとは別の、神の恵みを知りました。それで神に対する信頼を培ってきました。そしてついに、自分の子イサクを献げなさいと命じられた時に、この方であれば、何とかしてくださると信じて、それで行動に移したのです。

このように、「信仰」といっても、それは生きた神に対する生きた信仰なのです。主を人格的に信頼しているから、その信頼が、いざ命令される時に行いとして現れるのです。信仰とは、何か自分の言葉で、正しいことを語られることではありません。言葉によって、いくら語っても、行いがともなっていなければ、それは死んでいます。ヤコブは、「信仰も行いが伴わないなら、それだけでは死んだものです。(2:17)」と言いました。だれかが信じたと言ったから、それで救われたのではないですか？という人が多いですが、その言ったことが、果たして行いで確認されるか？ということなのです。人は、本当に信じていることを行うものです。行いに、何を信じているかが現れます。

### 3C 人を救う信仰

福音書には、「あなたの信仰があなたを救ったのです。(マルコ 5:34)」というイエス様の言葉が、

何度となく出てきますね。長血をわずらっている女が、群衆の間をかき分けて、それでイエス様の衣にでもふれれば、救われると信じていました。信じていることが、どんなことがあっても、この方に触れるのだという行いに現れました。このような行いと共に働く信仰こそが、人を救うのです。テサロニケ人たちには、その行いがありました。信仰から出た働きです。

## 2A 愛の労苦

### 1B 労苦する愛

次に「**愛から生まれた労苦**」を、パウロは覚えていました。真実な愛には、労苦が伴います。信仰に行いがなければ無益であるように、愛にも真実な行いが無ければ無益です。「Ⅰヨハ3:18 子どもたち。私たちは、ことばや口先だけでなく、行いと真実をもって愛しましょう。」とあります。

### 1C ラケルを愛したヤコブ

人は、愛によってあらゆる労苦を惜しむことはありません。ヤコブのことを思い出してください。彼は、イサクの家を出て、お嫁さん探しのために、母リベカの親戚のところに行きました。そこで出会ったのが、伯父ラバンの娘ラケルです。彼女が好きになりました。ラバンの下で、ヤコブは一か月働きました。そしてラバンに、何が欲しいかと尋ねられました。ヤコブは、「私はあなたの下の娘ラケルのために、七年間あなたにお仕えします」と言いました(創世 29:18)。そして、こう書いてあります。「29:20 ヤコブはラケルのために七年間仕えた。ヤコブは彼女を愛していたので、それはほんの数日のように思われた。」これが、愛の力です。愛はどんな労苦も惜しみません。

### 2C 非常に労苦した人々

パウロは、手紙で挨拶をしている人々に、それぞれの人の特徴を挙げています。ロマ 16 章には、「あなたがたのために非常に労苦したマリアによろしく。(6 節)」とあります。12 節にも、「主にあって非常に労苦している愛するベルシスによろしく。」とあります。くたくたになって、倒れてしまうぐらいの労苦している、という意味です。これは、愛がなす業です。

## 2B 行いに現れる愛

### 1C イエスの命令

イエス様は、ご自分の命令と自分の愛をいっしょにして話されました。「ヨハ 14:21 わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛している人です。わたしを愛している人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身をその人に現します。」イエス様は、父の愛の中におられ、その愛の中にいれば、父の命令を行わないということはできません。同じように、私たちがイエス様の愛にいれば、その愛ゆえにこの方の命令を行わないということは、ありえないのです。もし、イエス様の命令を行わないのであれば、そもそも、この方の愛を受け入れているのかどうか、疑われるものです。イエスの愛を受け入れていないから、この方の命令にも従えないのです。

## 2C 「羊を飼いなさい」

イエス様が、ペテロに三度、羊を飼いなさいと言われたのを思い出してください、イエス様は、「わたしを愛していますか。」と尋ねられました。ペテロが答えると、その度に、「わたしの子羊を飼いなさい。」「わたしの羊を牧しなさい。」そして、「わたしの羊を飼いなさい。」と言われました(ヨハネ 21:15-17)。イエス様を愛するならば、羊を飼うという労苦のともなう働きをしなさいということです。

## 3B 愛から離れた労苦

では、すべての労苦が愛から出ているか？というところでもありません。エペソにある教会に対するイエス様の言葉を思い出します。エペソには、偽使徒たちが教会に入って来ていました。彼らが偽使徒であることを見抜きました。そして、忍耐し、労苦していました。しかし、イエス様は、「黙示 2:4 あなたには責めるべきことがある。あなたは初めの愛を離れてしまった。」と言われました。愛から労苦するのではなく、ただ労苦することが目的となっていました。機械的に主に仕えていました。義務的になっていたかもしれません。主が私たちを愛してやまず、それでご自分のいのちを捨ててくださった。その愛に根ざし、建て上げられていくことによって、労苦します。

## 3A 希望の忍耐

そして、「**主イエス・キリストに対する望みに支えられた忍耐**」であります。

## 1B 主の到来

この希望は、何か漠然としたものに期待することではありません。テサロニケ人は、はっきりと「**主イエス・キリストに対する望み**」に支えられていました。それは、彼らを愛してやまないイエスが、再び天から戻って来られる望みです。1章10節を見てください、「御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを、知らせているのです。この御子こそ、神が死者の中からよみがえらせた方、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスです。」私たちは、自分を愛し、自分の罪のために死なれた方が、今、天におられるのですから、そこから降りて来られて、私たちが引き上げられることを願わないでしょうか？花嫁が花婿を待ち望むように、教会は、キリストがまた来られることを恋い慕っています。パウロは、その愛し慕う思いを、「主を愛さない者はみな、のろわれよ。主よ、来てください。」と言い表しました( I コリ 16:22)。

テサロニケ人への手紙で、パウロは、この望みを全体に渡って書いています。章ごとに、その終わりに書いています。1章は今、読んだように10節にありました。2章は19節です。「私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのは、いったいだれでしょうか。あなたがたではありませんか。」3章は13節です。「私たちの主イエスがご自分のすべての聖徒たちとともに来られるときに、私たちの父である神の御前で、聖であり、責められるところのない者としてくださいますように。」そして、4章も最後、16-17節です。「すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリスト

にある死者がよみがえり、それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。」そして5章も、最後のほう23節に書いています。「あなたがたの霊、たましい、からだのすべてが、私たちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのないものとして保たれていますように。」このように、主イエス・キリストが再び来られる希望にテサロニケ人たちは満たされています。

## 2B 忍耐しながらの待望

### 1C 困難な時

そして、その希望に支えられて、「**忍耐**」していることをパウロは話しています。キリスト者は、忍耐することがいつも勧められていますが、それは、やたらに我慢することではありません。そうではなく、希望があって、今の困難を中で喜びの中で耐え忍ぶ力が与えられるのです。ロマ5章2-3節には、「神の栄光にあずかる望みを喜んでいますが。それだけでなく、苦難さえも喜んでいますが。それは、苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。」と書いています。

### 2C 実が結ばれる時

苦しみを受けている時に、むしろ忍耐がそこで生まれて、練られた品性が生まれて、その品性がさらに希望を生み出します。そのようにして、キリスト者としての実が結ばれていきます。ヤコブは、手紙の中で、農夫にたとえています。「ヤコブ 5:7-8 ですから、兄弟たち。主が来られる時まで耐え忍びなさい。見なさい。農夫は大地の貴重な実りを、初めの雨や後の雨が降るまで耐え忍んで待っています。あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主が来られる時が近づいているからです。」主が戻って来られる希望があるので、困難な時を耐え忍び、その忍耐の中で、キリスト者として聖霊の実を結ばせていくのです。

## 3B 希望による救い

このようにして、希望に支えられて私たちは救いを達成します。希望があるので、神の救いが私たちのうちに働き、イエス様が戻って来られる時に完成されるのです。「ロマ8:24-25 私たちは、この望みとともに救われたのです。目に見える望みは望みではありません。目で見ているものを、だれが望むでしょうか。私たちはまだ見ていないものを望んでいるのですから、忍耐して待ち望みます。」主が戻って来られる望みがあって、それで救われています。

このようにして、テサロニケ人の信者たちには、希望に支えられた忍耐がありました。そして、愛による労苦があります。そして信仰から出てきた働きがあります。それらが教会だけでなく、地域全体に広がっていました。そこで私たちは問わないといけません。私たちに、信仰から出た働きがあるでしょうか？愛から生まれた労苦があるでしょうか？そして、主イエス・キリストに対する望みに支えられた忍耐があるでしょうか？それがあってこそ、キリスト者と自らを呼ぶことができます。